

敦賀短期大学25周年記念同窓会パネルディスカッション

テーマ「～未来へつなぐ同窓生の思い～」

平成22年10月23日午後2時00分開会

於；敦賀短期大学129教室

○司会 ただいまから敦賀短期大学開学25周年記念同窓会第1部パネルディスカッションを始めさせていただきます。私、本日司会を務めさせていただきます、敦賀短期大学21期卒業生の秋山政美と申します。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

それでは開演に先立ちまして、敦賀短期大学同窓会長大内裕子よりごあいさつを申し上げます。

○敦賀短期大学同窓会長（大内裕子氏） 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきました第1期卒業で同窓会長の大内裕子と申します。本日は遠方の方が多いと伺っております。我が母校を思い、遠くよりお越しいただき本当にありがとうございます。

さて、早いもので、私たちの母校敦賀短期大学は、開学25周年を迎えました。私が在籍していたころとでは今とでは随分学校も様変わりをしていりましたが、けれど、それはその時々において時代に沿ったものだったと信じております。

しかしながら、学生も減り、赤字経営の中、敦賀市の税金を投入し、本当に必要な大学なのかという声さえ上がっているのも事実であります。様々な問題を抱えている中、この25周年という節目において、母校の大切さを卒業生の皆さんと再認識し、母校の発展につながるようにとパネルディスカッションを行う運びとなりました。

未来へつなぐ同窓生の思いということで、同窓生みずからが議論することによって、素晴らしいアイデアや建設的な意見が得られるよう、期待しております。

年齢は様々ですが、ここで学んだ者同士です。ここで経験した様々なこと、感じたこと、世代が違っただけで思いは同じです。きょうは語り合いましょう。そして未来の人たちに

喜んでもらえるような大学になるよう、発展を願い、ごあいさつとさせていただきます。

本日はよろしくお願いたします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

続いて、本日御来賓として御臨席をいただいております、敦賀短期大学三橋昌幸学長より御祝辞をいただきます。

○敦賀短期大学学長（三橋昌幸氏） 皆さん、こんにちは。今御紹介いただきました、学長の三橋でございます。

本学は今、会長さんお話のように、ことしをもちまして建学以来25周年という節目を迎えることになりました。この機会を通して、この学祭にあわせて同窓会の皆さんが再結集を図り、そして今後の本学の将来性、行く末等について、皆さんなりの思いを、ひとついろいろと討議をしようと、こういうありがたい申し出がございまして、このようにパネルディスカッションを企画していただいたところでございます。

本当に今まで25年の間に、この間調べましたら、本学は総勢2,695名の卒業生を輩出さしていただいた。それが各地においてそれぞれ大きな活躍をしていただいております。

非常に本学の誇りと思っておるわけでございますが、かねて新聞その他でお聞きのように、本学は3年後に現在行っております、取り上げております地域総合科学科というものから看護学科という形に改編をしていくということが、敦賀市長であります河瀬理事長のほうから説明が公にされまして、今そのスケジュールにのっていろいろと論議をしているところでありますが、私ども短大の関係者としましては、先ほど申しましたように、この25年の伝統の重み、そしてまた今までに卒業していただいた同窓の諸兄姉の皆さんの重み、こういうものも十分に受け止めながら、何かいい形でこの本学が継続していくような、一番いい方法は何かということていろいろと現在論議を尽くしておるところであります。

最終的な結論はまだ出ておりませんが、きょうはそれぞれの時代に本学で勉強されました皆さん方の中から代表の方々がそれぞれこの25年の思い、そして将来にこの我々の短大

がどのような形で存続されるのが一番理想的かといったことについて、いろいろと論議をしていただくということを聞いております。

我々としましても、そういう御意見を十分に拝聴しながら、一番いい方法を模索していきたいというふうに思っておるわけでございます。

きょうはパネラーの皆さん方に大変世話になりますが、ひとつ忌憚のない御意見を十分に聞かしていただきたいというふうに期待をいたしておるところでございます。

先ほど申しました今後の一つの形が新聞報道されました後に、各地におられます同窓生の皆さんからいろいろと御意見を送っていただきました。非常に真摯な真剣な御意見、本当に母校を思う気持ちというものを十分に私どもは拝聴いたしましたわけでございますが、こういうものも含めて、今後皆さんで本学の一番いい方向、こういうものを見定めてまいりたいというふうに思っております。

きょうは同窓会の再結集ということに対してのお祝いと、それから私どものお祝いもあわせまして、ごあいさつにかえたいと思います。きょうはひとつよろしくお祈りを申し上げます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

それでは、本日のパネルディスカッションについて御説明をさせていただきます。

本日のパネルディスカッションは、テーマを「未来へつなぐ同窓生の想い」と題しまして、敦賀短期大学の同窓生6名による公開討論という形式を取らせていただきます。後ほど意見交換の時間もとっておりますので、会場の皆さんからも御意見をいただきたいと考えております。

パネラーである同窓生の選定に関しましては、皆様のお手元でございます、同窓生意見書という白い紙がございます。「敦賀短期大学と市立看護学校の今後の方向性について」という資料があります。この資料について、今回の記念同窓会の御案内と同時に同窓生約2,700人に意見を伺い、意見をいただいた約60名の中から実行委員会において協議し選ばせ

ていただきました。

皆様には後ほどディスカッションの中で自己紹介をしていただきますので、ここではごく簡単に御紹介をさせていただきます。

敦賀女子短期大学第1期経営学科卒業で同窓会長の大内裕子さんです。(拍手)

敦賀女子短期大学第6期経営学科卒業の山本典子さんです。(拍手)

敦賀女子短期大学第10期日本史学科卒業の飯野敦子さんです。(拍手)

敦賀女子短期大学第11期日本史学科卒業の鈴木美和さんです。(拍手)

敦賀短期大学第14期日本史学科卒業の坂上直人さんです。(拍手)

敦賀短期大学第22期地域総合科学科卒業の川窪大貴さんです。(拍手)

そしてコーディネーターについては、開学以来敦賀短期大学で教鞭をとり、現在も敦賀短大の教授、学監でいらっしゃいます外岡慎一郎先生に務めていただきます。(拍手)

それではパネルディスカッションの進行につきましてはコーディネーターにバトンタッチいたします。外岡先生よろしくお願いいいたします。

(外岡コーディネーター及びパネラー6名登壇・着席)

○外岡コーディネーター それでは、これからパネルディスカッションのほうに移らせていただきたいと思います。

まずパネルディスカッションのタイムテーブルと言いますか、最初に私のほうから15分あるいは20分ほど現在の敦賀短期大学の現状を中心としたお話をさせていただいて、これが一応基調報告という形になります。それが終わりましたから、そのテーマを一つのネタにしながら、きょうここに集っていただいた卒業生の皆さまと現状と課題、さらにはこれから大学はどうあるべきかというところをお話し合いをいただきたいと思います。

後ほどそれぞれ自己紹介していただきますけれども、皆さんいろんな職業あるいはいろんな体験をお持ちの方々ばかりで、そういうお立場から、ある意味では自分の母校としての思いと、それからまた客観的に外からこの大学を見ていただけると、そういうところで

非常に信頼のできる方々ばかりきょうは6人お集まりいただきましたので、またその意見の中でこの大学の未来というものが少しでも見えてくればいいなというふうにも思いますし、またお聞きいただいた皆さんのほうからも、ぜひ後ほど時間をとりますので、積極的にこの大学どうあるべきか、あるいは自分たちとしてはどういう大学であってほしいかというあたりをですね、お話しできればというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

基調報告「敦賀短期大学の回顧と展望」

○外岡コーディネーター それでは、基調報告のほうに入らせていただきたいと思います。

お手元のほうに、「未来につなぐ同窓生の想い」という表題で始まっているパワーポイントの資料があると思いますので、それをご覧いただきながら、お聞きいただければと思います。いろいろとデータのものがたくさん入っておりますが、モノクロ印刷にしちゃいましたので、やや見にくい部分等あるかとおもいます。もしかすると前のスライドのほうが見やすいかもしれませんので、その所が見にくい所があるかもしれませんが、そこは御容赦いただきまして、またスライドのほうとあわせて見ていただければと思います。よろしく願いします。

一応題名としては、「回顧と展望」ということで名づけましたけれども、越し方、行く末ということでお話を聞いていただきたいと思います。

まず最初に、「敦賀短期大学の環境」ということで、この敦賀のまちの特徴ということ、いろんなどらえ方があると思いますけれども、短期大学で高校生、高校卒業生を集めていかなければいけないという立場からいうところの象徴的な資料を一つ掲げてございます。

これは敦賀高等学校、非常に歴史もあって、この地域の教育、中等教育の中心的な役割をこれまで果たしてきた高校、こちらの進学状況というのが公開されておりますので、

そこからいただいたデータをまとめた近年4年間の進学率、特に県外に大学進学する数がある年々の卒業生の何パーセントぐらいいるかということを示しました。

この前のスライドですと、上のほうの青いラインが4年制大学、それからオレンジ色、赤いラインが短期大学ということになります。

それぞれ年度によって当然のことながら変動はあるんですけども、ほぼ大体その85%から90%ぐらいの所で県外に進学をしているということでもあります。

昨年といいますか、21年度の卒業生、つまり今年4月に大学に入ってきた学年の高校生、高校卒業生ということと言いますと、短大それから4年制大学ともに大体86%ぐらいの卒業生が県外に進学していく。実は福井県全体では、北陸地域どこも、特に富山が実は一番県外進学率というのは高い地域だというふうに言われておりますけれども、福井県でも県外進学率というのは大体65%~70%ぐらいでもうここ20年、30年ぐらい推移しております。ですから、この地域のまず基本的な特徴として、若者の県外流出が顕著な地域であるということですね。

もちろんこういうことはわかった上でこの短大を敦賀につくるという決定をしているということは当然前提にしなければいけないことですが、その状況というのは、残念ながら敦賀短大ができたから変わったということにはなっていないということもここから読み取れるのかもしれないというふうに思います。

それからまた、こうして県外に出ていった人たちがその後どうなるのかということで申し上げますと、県外に進学して、比較的いわゆる俗な言葉で言えば偏差値の高い大学に進学した人たちが地元に戻ってきて就職しようということを考えた場合でも、福井県内にその受け皿となるような就職先というのは決して多くはない。むしろ、例えば長男でこの家を継がなければいけないとか、親のいろいろ面倒を見なければいけないとかという事情が生じない限り、例えば都会へ出ていった若者はそのままそちらで定着をしていってしまうという傾向が、この福井県あるいは敦賀については言えるのではないかと。まずそういう所に

ある大学だということがまず敦賀短期大学の環境としてとらえておかなければいけなかったし、現在でもそういう環境が前提になるだろうというふうに思います。

そういう中で、敦賀短期大学の実績ということで、これまでの敦賀短期大学の卒業生の出身地域別の円グラフというのを次に掲げてございます。

これは全卒業生、先ほど2,700人ぐらいということで御紹介がありましたけれども、大体ほぼその全部のデータでございます。

これをご覧いただきますと、大体全体の6割弱が福井県内、敦賀市内が20%弱と、それ以外の地域から大体4割ぐらいの学生がこの敦賀短大に来ている。つまりこれは単純な言い方で申し上げますと、敦賀短期大学があるということでこの敦賀にとどまった若者もあるし、それからまた県外あるいは市外から多くの若者を呼び込んでいる、そういう実績として一応読むことができるだろうというふうに思います。

敦賀短期大学の卒業生と申しますか、入学者、もとは入学者ですが、これは本当に全国から来ておりました。日本史学科があるところは8割が県外出身者でございましたので、その関係で非常に多彩な地域から来ていた。実績としては、実は佐賀県だけであります。来ていない県、出身者のいない県というのは佐賀県だけ。そういう場所になっていて、若者をとどめる呼び込むという効果をこれまで実は果たしてきたという実績はあるだろうというふうに思います。

一方卒業。出のほうですね。卒業した後、どういう進路に行ったかということを示しましたのが次の円グラフで、一番多いのは、いわゆる専業主婦ということで23%ということになっております。

ただこれも今、二つ理由が多分あると思うんですが、一つは半分ぐらいの歴史、歴史の半分ぐらいが女子短大であったということで、女性の卒業生が多いということが一つ。それから、それとも関連しますけれども、結婚のときに退職をされて、それまでここにほかの所に出てくるような様々な業種の所でお仕事をされていた。けれども、現状では専業主

婦であるという形。そういう方もここには含まれているという数字ではありますけれども、業種を見ていただければわかりますように、やはりかなり多種多様な業種の所に行っている。もちろんここには日本史学科、経営学科、地域総合科学科それぞれあるわけですが、それぞれの専門性というものに直接かかわるものもあれば、ある意味では、ほとんどそれとは関係のない世界に飛び込んでいって、今現役で働いていらっしゃる卒業生が多くいるということになるかと思えます。

このあたりまた後でパネルディスカッションの中で今皆さんがおられる職場なり現場という所で、この大学での学んだことの意味合いというようなことをそれぞれ御紹介いただく場があるんですが、そのあたりでもこのグラフの意味というのでも深められるんじゃないかというふうに思っております。

次に、敦賀短期大学の現状ということで、棒グラフと折れ線グラフを組み合わせたものをお示ししてございます。ちょっとモノクロで前のスライドの緑とピンクの所の差が見にくい所があるかもしれませんが、これは敦賀の市内者の数と市外者の数、これをわかるような形で棒グラフで分けて、さらに市内者率というのを、全体の学生の中で各年度市内の出身者がどれくらいのパーセンテージあるか、それから定員の充足率ですね、これを合わせて示したものであります。

このグラフからいろんなことが実は読み取れるわけですが、統計の専門の先生に分析していただいたところ、この三つ、皆さんのお手元の資料にもありますので、ご覧いただければと思いますが、充足率が低いと市内者率にはばらつきがみられる。それから充足率が高いと市内者率はほぼ安定して低い。それから定員数を200から120に減らした段階があるんですが、平成16年以降を除いても余り傾向に変化は見られない。

要するにというか、まとめて見ますと、要は短大の入学者数の減ということの背景にまず市外者の減少があるということは間違いなからう。そして、市内者の増加によってもその減少分は補填できていない。だから結局その入学者の中の市内者率が上がると、充足率

というのは決して上がっていない。あるいはむしろ下がっていることがあるということがこのグラフから読み取れるであろうとおもいます。

それから、棒グラフそのものの動き、あるいは充足率そのものの所で見ますと、平成7年、平成6、7、8ぐらいの下落が非常に顕著であります。実は平成8年段階で落ちた水準というものを、はっきり言えば二度と回復できていないというのが、このグラフから読み取れる。つまり入学者100名以上に行くことがほとんどないということでございます。

平成7年、8年にかけて何があったかということで思い返してみますと、平成7年という年は実は現河瀬市長、理事長が誕生した年であります。その前の年まで敦賀短大を4年制大学化しようという前市長、この大学の創立者でもあります高木孝一市長が、4年制大学に転換しようという計画を進めておりました、これが実は市長選の争点の一つになりました。その結果、現河瀬市長は、わかりやすく言えば、その4年制大学に反対という形で当選をしましたので、4大構想は凍結になった。4年制大学になるとか、4大化にはいろんな問題があるとかいうことは、もう新聞報道で県内には喧伝されましたので、そういった影響があるのではないかと。

あるいは平成7年の末に、今日もパネラーとして来ていただいております大内さんが大きくかわられたことですが、高速増殖炉もんじゅの事故がございました。ナトリウム漏れの事故が。その影響というのがやはり県外からの学生の確保という点では厳しい環境を生じたのではないかなという分析を、自己点検の作業の中ではいたしております。

ただそういった問題というのは、いずれ人のうわさも何日というようなことで、そういった問題でいったん下落しても、大学の経営努力あるいは様々な工夫によって回復できる可能性がその後なかったわけではありません。その点、大学経営ないしは私なども含めて、努力不足であったことは認めざるを得ないとおもいますけれども、結果としては100を超えることはその後実現していないということでもあります。

その間男女共学、地域総合科学科。男女共学にしたのが平成10年でございます。ですか

らここでわずかに100を超えた年が1年だけあるんですね。平成8年以降。この平成10年という年が男女共学にした年であります。

ですから、一定の効果は持ったんですけども、かつての人数を回復するには至らず、結局その平成10年の人数というものもその後上回ることができないという形でもって、現在まで推移してきているということでございます。

これが先ほど最初の同窓会長のあいさつにもありました、赤字経営が続いて、あるいは税金を投入することの是非が議論される大きな要因になったわけでございます。

その話と連動いたしますけれども、過去4年間の今度は敦賀市内、福井県内、福井県外ということで分類して棒グラフで示しました。ちょっとでこぼこした形での入学生の数でございますけれども、社会人学生等の数が背景にあります、全体の傾向としては、やはり地域総合科学科に転換してから県外者の減少というのは確かに顕著になりました。

先ほどから申し上げているように、市外者、県外者の数でもってある程度もった大学が、県外者、市外者のそういう入学が少なくなることで定員が確保できなくなって、しかも市内者は増加させることができていないということで、明らかに県外者の減少が顕著になれば当然学生数は少なくなる。

それと、なぜ県外者が減ったのかということについては、近年の景気動向、それによる地元志向、あるいは資格・実学志向でどうも地域総合科学科というものと必ずしもうまくマッチングしないのではないかと。あるいは専門学校との競合、そういった問題が当然あるだろうというふうに思います。

地元志向には恐らく二つぐらいの要因があると思ってまして、一つは今ここに掲げました景気動向の話、県外には出せない。経済的な理由で出せない。それからもう一つは最近の若者の傾向として、割合もう親元を離れないというか、地元で地味にという、そういう志向性を持つ若者がふえてきているということも確かにあるかもしれません。

それからもちろんそれぞれの各大学の努力で地元の子を外に出さないような大学づくり

を、それぞれの地域の大学がやっているの、敦賀までは回ってこないということがあるかもしれません。

もう一度この敦賀高校の県外進学率を見直してみたいわけですが、実は地元でどれだけ確保できるかという話で申し上げますと、実は敦賀市内の高校生数というのは、2010年のいわゆる学校基本調査のデータでは、1年生が719、2年生648、3年生637ということで、例えば2011年の学生募集ということを考えますと、敦賀市内の高校生数というのは637、敦賀高校のパーセンテージから考えますと、1割ぐらいしか地元に残らないわけですね。

それでしかももちろん学校に、敦賀高校の数ということでいえばもっとパーセンテージは下がってしまいますので、例えば昨年度のと申しますか、ことし4月の入学の段階での敦賀高校から短大に進学した数というのは38名。そのうち県内は5名しかおりません。敦賀市内には高校は3校ございいますが、一つは工業高校でほとんど100%が就職である。お隣の気比高校、これは敦賀高校よりも進学者ははるかに数字は低いわけですので、その点ではこの数というのが非常に大きな意味を持つてくるということでございます。

ですから、3年生の637の例えば今の県外進学率が変わらないという前提で考えて、65人全部持ってこれても、この大学の120定員は埋まらないということでございます。

そこで、まとめのほうに入っていきたいんですけども、前半でお話してきた話というのは、この敦賀短期大学が果たしてきた役割というのが、これからのパネラーの皆さんの体験談と申しますか、自分自身の経験の中でいろいろなお話をしていただけたと思いますけれども、とにかく多様な人材を地域社会へ供給してきたということは間違いのないと思います。それからまた地域振興の担い手である若者を確保し、またそれを育てるという役割をこれは学科の構成にかかわらず、これまでできてきていることは確かであると思います。

よく言われることですがけれども、地域振興の担い手というのは、よそ者、若者、バカ者というこの三つ。要するにその地域に生まれ育った人にはなかなか自分の生まれ育った地域のよさというのがわからないので、やっぱりよそ者に入ってきてもらって、それで活性

化してもらい、あるいはそのいい所を見い出してもらい。また実際何かやろうとしたときに、どうしても年寄りばかりでは神輿一つ担げないというようなことになりますので、やっぱり若者の数というのは、一定度どうしても地域には必要である。

それからいわゆるバカ者というのは、要するに強力な推進者ですよね。もうそれしか見えてないかもしれないけれども、そういう強力な推進者。それは例えば利益とか儲けとかそういうものをもう考えずに、自分の信じるところを進む。あるいはまたみんなをまとめ上げていくぐらいの、あの人に言われたらしょうがないとかね、一方でバカにされながら、一方ではその地域の中心になっていくような、そういう人が必ず今各地域で地域振興に成功している場所では、この3点セットが全部そろっているわけでありまして。地域振興で成功している地域のホームページでも本でも読んでいただければ、これにまさに当たる人が、人材が必ずその地域にいます。

そういう意味では、この大学という所は、私自身も敦賀にとってはよそ者であります。敦賀では「旅の人」と言います。敦賀では、例えば敦賀出身の方で、もう既に大阪のほうだとか京都のほうに出てしまって、まず敦賀に二度と帰ってくることはないという方に対しても、「あの方は旅に出とる」と言います。そういう言い方をするんですね。

私なんかはもう20年以上敦賀に住んでますけど、多分ずっと旅の人ということで、よそ者なんですよね。けどもよそ者がやはり敦賀の活性化にある程度の仕事ができるだろう。それからこの大学というのは、もちろん県外、市外から来ているよそ者、若者、いるわけですし、私あたりは多少バカ者の要素も含んでやっているとしたいと思いますけれども、やはり大学があることによって、こういう3点セットは獲得できるチャンスというのは随分あるだろうというふうに思います。

しかもそこにはやっぱり多様な人材がいないと、そういう力が出てこない。大学自体がその多様な人材を含み込んでいる。またそういうものを出していくという機能を持たない限りなかなか難しい。しかしながら、大学がここで継続していくためには、最終的には、

「もうなんだ学生が来ていない大学なんだから、学生、若者たちにも需要がないんじゃないですか」と、こう言われてしまうのはしょうがないですね。

ですから、やはり学生確保のための努力というのはやはりきちっとしておかなければいけない。そのためにはどうしたらいいかというお知恵を、きょうパネラーの方々にも少しお伺いしたいと思いますけれども、まず間違いなく敦賀市内者のみでこの大学の定員を充足していくことは不可能だろうと思います。たとえ市内各高校の県外進学率を5割にまで下げるとかね、そういう画期的な何か大きなことがない限り難しい。

ですから、市外、県外からどうやって進学者をこの大学が獲得していくかと。これは一方では敦賀市の税金を大量に投入しながら、何で市外、県外から来たやつに投資しなきゃいけないんだという議論は一方であると思いますが、それは一方で地域振興にこれだけ若者の数を確保し、地域振興に役立ってますよという説明で成り立つ可能性はあると思います。

それから人材育成という点では、やはり地域の中堅、中核となる人材の育成を目指すべきであろうとおもいます。これは要するに県外の4年制大学へ行ってしまう人たちというのは帰ってこない。帰ってきてもなかなか地域の中堅、中核となるような場所がない。となると、地元で育ち、地元で学んで、そして地元の企業で活躍していく人たち、きょうのパネラーの中にもおられますけれども、そういう人材をきちっと育成していく。

敦賀短大卒業でほかの超有名大学の同期生と混じって、自分は負けた経験がないというお話も後で伺えると思いますが、やはりそういう中核の人材というのは、この大学が出していかなければいけないし、それからまた多様な個性、それから協働力、実行力と言われるのは最近の若者に欠けているとさえ言える、そういう力をきちっとこの大学が育てられるようなシステム、それをやっぱりきちっとつくっていく必要があるだろうというふうに思います。

基調報告は大体この辺で終わろうと思うんですけども、これから行うパネルディスカッ

ションの論点といたしましては、二つぐらい考えていただこうということで、皆さんに実は事前にお示しさせていただきました。

やはり「地域にある大学の役割というのは何なんだろう」ということで、まず最初に、自分の今あることと、短大時代の経験がそこでどういうふうに役立っているかというお話も伺いたいし、それから皆さんもう既にお子さんを持たれたり、あるいは企業で働かれて、生活者としての立場も持っているわけで、そういう所から見て、それぞれの地域の大学の存在意義というのは何だろうということもまた、これは同窓生だからできることといいですか、卒業生だからできることだと思いますが、そんな話も聞いてみたいなど。

それからまたもう既に先ほど学長のごあいさつにもございましたように、敦賀短大の将来構想については具体的なものが示されていることは確かですが、それをある程度前提にしながら、「今後どんな大学になってほしい、あるいは同窓生にとってどんな存在であってほしいか」ということも、やはりきょうのテーマにもあるように、やはり同窓会、あるいは同窓生としてきちっとしたメッセージを大学あるいは地域に送っておくべきではなかろうかということで、このあたりのテーマを中心にきょうは進めたいというふうに思います。

～パネルディスカッション～

○外岡コーディネーター それでは、次にパネルディスカッションのほうに移っていきたいと思います。

まず最初に、きょうおいでの6名の方々自己紹介を兼ねて、今自分が働いたりあるいは生活しているということを前提にしながら、大学時代学んだことがどんな形で役に立っているかというか、あるいは大学時代のこういうことがあって、自分の今に非常に力になっているということがあれば、1人ずつ御紹介いただきたいと思います。

では、大内さんのほうから、順番にお願いします。

○大内裕子氏 私は第1期生ということで、昭和63年にこの学校を卒業いたしまして、旧動燃、現在日本原子力研究開発機構、短大の向かい側に敦賀本部を構えておりますが、そちらの会社に14年間勤務をいたしました。当初私が配属されましたのは、ナトリウム漏えい事故を起こした高速増殖炉もんじゅ、こちらで私は14年間仕事をしてきました。

長男の出産を機に退職をいたしまして、現在子育てに奮闘中なんですけど、長男が8歳、長女が4歳、次女が2歳ということで、まだ本当にどっぷり子育てにつかっている状態です。

けれどやっぱり、会社も離れてもうかれこれ8年になるんですけども、会社でやっぱり一番役に立ったこと、この学校で学んで、本当に役に立ったということは、勉学はもちろん、そのときは私は経営学科でしたから、秘書学概論とか、秘書士の免許を取るようなそういうコースというか、そういう授業がありまして、そういうことは本当に卒業してすぐ実践に生かすことができました。

そういうことはもちろん当然のことではあるんですけども、一番何がよかったかと言いますと、私は当時から学生会の活動もやっていましたし、それから大学祭の実行委員であるとか、そういうことをいろいろ経験してきたわけですけども、やっぱりまず社会人になる前に客観的に社会を見つめることができたということ、客観的な立場で社会経験を踏むことができたということで、いろんな経験を踏ませていただいて、社会という所はこういう所なんだっていうことをこの大学で学んだことが一番大きいことだったのではないかと思います。

ですから、会社に入っても、組織云々ということはいろいろありますけれども、やっぱり学校で培ったその実践的なことが一番役に立ちました。

当然今子育てにおいても、何かやっぱり会社を辞めるときはすごく悩んだのも事実なんですけれども、1人の人間の形成を行うということにおいて、今まで自分がしてきた経験

は一つも無になることはないなということをも今もなお実感して子育てを行っております。

○外岡コーディネーター 大内さんの場合は、割合大きな企業と言ってもいいと思うんです。敦賀では大きな企業のうちに入る。当然のことながら同期生で、はっきり言えば優秀な大学からたくさん同期生がいて、その中でのやはりプレッシャーとか競争とか、そういうところはあったと思うんですけれども、そのあたりをどう例えば頑張ったよという話も御紹介いただくとありがたいんですが。

○大内裕子氏 広報という仕事をしておりましたので、原子力の理解を深めるためにどういうふうにやっていったらいいとか、会社として、そういう部署にいたわけなんですけれども、当然もんじゅの中にも同期はいましたけれども、広報という大きな視点から東京の本社のほうに出向いて同期ともいろいろ仕事をしたわけなんですけれども、みんな本当にすごい大学をみんな出ていて、最初は確かに気おくれする部分がありました。私は何かだれも知られていないような、ましてや1期生でしたから、ああそんな大学があったのというような感じでしたし、そんな中で負けられないじゃないですけど、今まで培ってきたことをすなおに表現していけばいいんじゃないかということで、確かにプレッシャーみたいなものがあつたのも事実ですけども、一つの会社の目標に向かって動くことができたというのは、この学校で目標に向かって、いろんな目標に向かって学校をつくり上げてきたという経験が生かされていたんだと思います。

○外岡コーディネーター ありがとうございます。じゃ山本さん。

○山本典子氏 第6期卒業の山本です。卒業後は自動車部品のメーカーに就職いたしまして、生産管理のほうの仕事を7年ほどさせていただいておりました。現在中学2年生の娘がおりまして、その間、中学受験がありましたので、子供のほうに専念するということで辞めてまして、今業種は違うんですけれども、経理事務、中堅スーパーの経理事務の仕事に就いております。

この学校で学んで生かされたところというのは、やはり経営には直接携わらないんですが、

経営する人の目線とか視線とか、どういうふうに会社が動いていったらうまくいくのかというのを見たり、実務的に考えたりすることができるようになったとは思っております。それは今子育ての中でもある意味役に立っていると思っております。

○外岡コーディネーター はい、ありがとうございました。では飯野さん、どうぞ。

○飯野敦子氏 第10期日本史学科、当時は資料・情報管理コースというのがあったんですけど、そちらを卒業した後に、研究生で2年間在籍しておりました飯野敦子と申します。

私は福島県いわき市の出身で、実家は神社と保育園をやっております。実家のほうに国指定の重要文化財がたくさんありまして、ただ国指定の重要文化財で、古文書が1,683通あるんですが、その古文書を資料整理しなくてはいけなくなりまして、それが私の小さいときからの夢というか、目標でした。

その勉強をするのに、まず実務経験といいますか、古文書の資料整理を実務経験つけるというのが、私の目標ではあったんですが、この短大は古文書を手でさわれるんですね。その手でさわって実際に資料整理もさせてもらって、そういう資料の整理の仕方とか、古文書への接し方とか、そういうのが一つ一つ身をもって経験できる貴重な場所だったんです。

今は修復のほうもやっていますが、その修復というのも重要文化財になってしまうと自分で修復はできないんですが、文化財とか、あともものにふれる人的被害が一番大きかったりとかもするんですけども、その最新情報だったりとか、はやりすたりもあるんですが、例えば手袋を着けるとか手袋を着けないとか、そういうのから始まってそういうお話ができるというのが、この短大ではとても生きた情報を得られる貴重な場として今でも交流させていただいています。

卒業した後、実家の神社に就職をしまして、中世文書のデジタル化をすぐにしました。今は中世文書の後、近世文書があるんですけども、近世文書は2,000通ぐらいありまして、それを何とかまちぐるみ、地域ぐるみで整理をしていきたいなというふうに。ただ私

のほうの地元は、日本史系の学校がないんですね。大学もないですし、短大もないですし、あるのは本当にどこにでもあるような学校とってはいけないんですが、地元のことで疑問とか質問とかあるときに、地域のことを知りたいときに、じゃ誰に聞けばいいんだろうって、その受け入れ先がない地域なんですね。本当に敦賀にいとあつて当たり前のものが地元になんないんですね。そういうのを地域の人たちと地域資料を整理することを通して、あと文化財のことを考えながら、日々勉強したり、模索する日々を過ごしています。

○外岡コーディネーター 飯野さんは、御自分の神社とかいうところの資料を全部デジタルアーカイブにしてCD-ROMをつくられたわけですけど、その辺のことというのは、実は大学ではまだまだ飯野さんがいるころには本格的に例えば授業の中でやっているという段階ではなかったんですけども、そのあたりはどういう形で大学で勉強されたのかなというところもちょっと紹介していただければと。

○飯野敦子氏 私の在籍したときには、まだデジタルカメラがそんなに普及していなかったころなんですね。それでちょうど多仁教授が全史料協という研究会があるんですけども、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会という機関がありまして、こちらの研究会で発表するぐらいとても当時珍しい内容だったんですね。資料をデジタルカメラで撮影して、それをデジタル処理して、アーカイブ化していくというのが、ちょうど私がゼミに入ったときに多仁先生に何を研究したいかって言って提出するときにあったんですけども、そのときに私、実家の資料をデジタル化するのにデジタル化するシステムを勉強したいっていう話をしまして、それも歴史の授業の一つ、歴史の授業とか勉強の一つだというふうに多仁先生は認めてくれまして、私は2年間それを勉強させていただきました。

○外岡コーディネーター その結果今では、もうそちらの方面では先進的なお仕事を飯野さんのほうはされているということになるろうかと思えます。

鈴木さん、今のお仕事の話から始めていただきたいと思いますけど。

○鈴木美和氏 私、鈴木美和と申します。この短大を卒業いたしまして、編入学いたしま

して、大学を経て今の会社でございます、株式会社ビックカメラのほうに勤めております。勤めまして、ことし11年目を迎えました。ビックカメラにおいては、この短大で役に立っていることとしまして、実行力がとても役に立っていると感じております。

今の学生に足りないものといたしまして、頭でっかちな新入社員がとても多いんですね。私はそうなりたくないと思いましたが、ここの先生方、サークル、ゼミ等で役立ったことがとても今の仕事に、日本史ではありませんが、日本史とは全く関係がないと言っていい会社だと思えます。その中で役に立っていると思っております。

○外岡コーディネーター 特に鈴木さんの場合には、私自身も印象に残っている非常に頑張り屋で、歴史のほうの日本史のほうの授業や何かに取り組んで大分ゼミナールでは苦勞もされているんですけども、今そのビックカメラのほうでは、法人営業部の主任という立場で、言ってみればビックカメラという会社の全部を見られる立場にいると思うんですね。

そういう中で、例えば日本史とは全く畑違いだけれども、今ちょっと言っていたことなんですけどもね、日本史学科でそれだけ頑張ったことが全く別の領域に行っても役立つことというのは、これは先ほど山本さんから出た話とも似たようなところがあると思うんですが、そのあたりもうちょっと御紹介いただけるといいんですけど、例えばこういうことがあって、こういうふうにやったんでうまくいったというようなことがあれば、どうでしょう。

○鈴木美和氏 例えば、法人営業室というのは、ビックカメラの中では特殊な分野になります。デパートとかでは外商の部分という形で考えていただければと思います。

その中で人とかかわることが多いんですね。ビックカメラは基本にお店を構えております。なので、お客様に来ていただいて、そこで販売するという形で終わってしまうことが多いんですが、ビックカメラの法人営業室というのは、対会社でお取引をさせていただいております。そのため会社との関係性、その営業担当マンとの信頼性を築くのに、私が

役立ったと思っているのは、サークルであったり、例えば考古学で敦賀市と協力して短大のときに疋田のほうに掘りに行ったことがあるんですけども、そういった敦賀市の方ですね、市役所の方、もしくは住んでいる市民の方とふれ合って、こういった形でということが出来る。編入しました大学のほうではそういったことというのはやはり広がってしまいますので一部の人しかできないんですね。その研究したゼミの人。というのではなくて、この短大ですと、全学生が望めば自分が望んだことに対して先生たちに御教授いただいたり御協力いただいて、自分で実行できる、そんな短大だと私は思っております。

○外岡コーディネーター ありがとうございます。

坂上さん、じゃあ、次をお願いします。

○坂上直人氏 私、先ほど御紹介にあずかりました14期卒業の坂上でございます。

私は、日本史学科文化財コースにて学ばせていただいて、やはり一番印象に残っておりますのが、この地の伝統工芸であります越前焼の技法を学んだこと、伝統にふれたこととございまして、集中力や観察力がついたことと思います。

また、学生生活では、喜怒哀楽、挫折やらいろいろ経験し、充実した2年間でございました。短い間でございましたが、今でも心深く残っております。とても思い出のある母校でございますので、この学びやがいつまでも変わらず存続されますことを心より願い、また同窓会の今後のますますの発展を祈りたいとおもっています。簡単ではございますが、私の自己紹介といたします。

○外岡コーディネーター 読まないでさ。(笑声) なかなかユニークな、彼自身はいろいろと今地域での活動をしているというのが多分中心だと思いますので、そういう中でやはりコミュニケーション能力だとか、そういった所で多少大学で学んだこと体験したことが役立っているというふうにお考えになっているというふうには理解していいんでしょうかね。

(坂上氏うなづく)

ありがとうございます。何かね、無理やり言わしたようなところがありますけど、じゃ最

後に川窪さんのほうから。

○川窪大貴氏 改めまして、こんにちは。22回生の川窪といいます。こちらには19年度入学で、ちょうど地域総合科学科ができて間もないころなんですよね。僕が地域総合科学科の2回生になるんだと思いますけども、そちらで、小さいころから考古学がやりたくて仕方なかったのも、一番行きたかった国学院大学を落ちたこともあり、こちらの網谷先生にぜひ来てくれということも言われたこともあり、こちらに入学させていただきました。

考古学はもちろん、外岡先生に古文書の読み方を教わったり、多仁先生と一緒に古文書をいじったり、北野先生にパソコンの使い方を教えてもらったり、教務課の皆さんと一緒に学祭やら何やらの計画を立てたりで、本当にいろんな経験をさせていただきまして、去年より大分県の別府大学のほうに編入させていただき、そちらの文化財学科で今も考古学やら歴史やらのことを研究したり学んだりする日々を送っています。

○外岡コーディネーター 今にどう役立っているか。

○川窪大貴氏 そうですね。敦賀短期大学で、考古学や古文書、民俗学、歴史周辺分野のありとあらゆるといたらちょっと言い過ぎなような感じもするんですけども、多くのことをやらせていただいて、別府大学に編入してやはりほかの4年制大学ですと、地域総合科学科のようにやりたいことを全部やれるのではなくて、文化財学ならば文化財学の中の保存修復の道か考古学の道のどちらかしか選べないんですよ。なので僕の今いる別府大学では、考古コースを選んでしまったら考古学しかできなくて、民俗学に余りふれることができないですね。

そういう意味で僕がこの敦賀短期大学というワンステップを踏んだことによって、その辺にいるほかの4年制大学よりも多くの学問に携われたということは、今の大学生活においても一部の学生から非常に一目置かれているといたら自意識過剰なんですけども、そういう自覚もありますので、こういうところがこの大学で僕が得た一番大きな所だと思います。

○外岡コーディネーター ありがとうございます。それぞれ今のお立場というか、環境というのは、違いはあるんですけども、この大学で学んだことというのが、一つはそれぞれの所属した学科の専門的な勉強ということはまずあると思いますけれども、それ以外に大学時代に経験された学生会活動であるとか、サークル活動であるとか、あるいはゼミ、演習の授業の中でかなり先生たちは理不尽なことを常に言ってくるので、そのあたりがなかなか克服しえずに悔し涙を流すとかっていうこともたくさんあったと思いますけれども、そういう中で鍛えられたことというのが結果として少し生きてきているというようなことがうかがえたのではないかなというふうに思います。

一方、今度は少し視点を変えまして、皆さんがいわば大人の立場で、もう既に子供さんを育ててらっしゃる方もいらっしゃるし、また後輩を厳しく指導する立場にもおられる方もいらっしゃる。そういう中で先ほど鈴木さんのほうからも今どきの大学生なんて言葉が出ましたけれども、今大学というのは、この敦賀短期大学が個別の直面している問題よりももっと大きな形で、大学の存在意義というのが非常に問われている時代であることは確かだと思います。

もう多くの4年制大学はもう一般教養大学で、研究機能というのはほとんど失っております。短期大学で研究機能を残しておこうとすると、これ非常に大変なことがあることは確か、というのは、私個人的にも感じていることですけれども、そういったことを前提にしつつも、この大学というものにどういうものを例えば企業の立場から求めるのか、あるいは大学生に対して、大学でこういう勉強をしてきてくれということを期待するのかというあたりを、まず鈴木さんあたりからちょっと口火を切ってほしいと思います。

○鈴木美和氏 そうですね、学校で学んでいくことに対しては、例えば日本史の何を専門的に自分は学んできましたとか、法学部を出て法律のほうを学んできましたといったところで実際の現場に出ると、そこまで役立つということは少なくなっていくと思います。

それよりも人間としての基礎能力を上げていただきたいと思います。

それは普通に会話ができるであつたりとか、指示を聞くことができる。つい最近のお話をさせていただきますと、新入社員で入社してくる子たちというのは、どちらかというと、自分の意見の主張が強いんですね。意見ばかり言って頭でっかちで、言うんですけれども、それに対してこちら側から、会社ですので指示を聞いていただかないといけないので、言った場合にも、自分はこうだからできませんと、簡単にできませんという言葉を使うんですよ。

そうではなくて、一応自分で一回できるかどうか呑み込んでみて、それができない。私たちはその指示を出しているときに、できないと思ってももちろん指示をしています。そんな100%できる新入社員なんてほぼいないですから、その中で、普通に報告ができる、連絡ができる、相談ができるということを求めています。

○外岡コーディネーター 全く今100%できると思って部下に指示しているわけではないというのは、我々教員の立場も同じで、学生がみんな100%できるんだったら、別にこちら心配せんでも。だからやっぱりあえて高い課題を与えてということが、今いみじくも卒業生の所から聞いたというのは大変私はうれしいと思うんですが。

大内さんなんかも大分御苦労される中で、今は離れてらっしゃいますけど、長い企業生活の中で、大学生に対して期待することなどあれば、お願いしたいと思います。

○大内裕子氏 鈴木さんの意見と重複する部分もあるんですけども、何と言いますか、さめている。さめているというか斜に構えているというか、そういう印象を受けます。

何に対しても心の中は本当は熱くなっているのかもしれないんですが、それを見せないというか、簡単に言うと、ひねくれているというか、何でもっと素直にこの目標に向かって頑張ろうという気持ちを見せないのかなという感じを受けます。

だから、私たちが入社したころは、今では死語ですが、新人類と言われました。63年入社の新入社員は新人類だなんて言われました。もう今では死語となっていますけど、その新人類であった私でさえも、今どきの若い子はって言いたくなるんですが、その今どきの

若い子はっていうと、ああ私も年をとったのかなと、こうさみしくもなるんですけども、何かこう確実に何か変わってきているというのは確かにあります。

だから、もっとう素直に自分を出すというか、素直に人の意見を受け入れるとか、そういうことにちょっと今欠けているんじゃないかなという気はいたします。

○外岡コーディネーター 現在短大のほうでも、当然のことながらそういう学生をたくさん抱えて、学長以下いろいろ工夫もしているんですけども、特に自己表現力が弱いとかコミュニケーション能力が弱いとか、そのあたりが実は本来大学でやるべきかどうかということはまだまだ私個人としては疑問があるんですが、現状としてはそういうものをやはり最後の学校として大学は担わなきゃいけない部分というのは間違いなくあるなというふうには思いますね。そういう点で、そういったことを大学というのは、役割として果たしていかなければいけないんだろということ、人づくりという面であるんだろと思います。

一方また近年の大学というのは、企業もそうだと思うんですけど、地域貢献とか地域への活動への参加、あるいは地域振興に何かその大学も役立ってほしい。先ほどよそ者、若者、バカ者なんて話もしましたけれども、そういう意味で大学がその地域と交わるという点について、少しまたお話を伺いたいと思います。

先ほど飯野さんからは地元でそういう機関がないので困っているという形でのお話もありましたが、例えば川窪さんが今在学されている別府大学なんかでは、例えば別府市、温泉だけでも儲かりそうな所なんですけど、そういった所で大学がどんな活動をしているとか、あるいはその中で大学はどんなものを求められているかということ、をちょっと事例で御紹介いただきたいと思います。

○川窪大貴氏 大分県の別府市というのは日本一の温泉湧出量を誇ってまして、大変な観光地ですね。ですので、国際都市というか、そういうわけで、別府大学でもその3割の学生が留学生という非常に特殊な学校なんです。

学校側としても市の側としても、やはりその国際関係の話題というのは非常に興味のある分野のようでして、例えば別府市の夏祭り、盆踊りに別府大学の留学生の皆さんに盆踊りに参加していただくであるとか、商店街のイベントですね、この間僕もそれに参加してきたところなんですけども、その中で幾つかのサークルで出店を出していただくとか、そういう地域のイベントやそういったものに積極的に別府大学として参加させていただいて、そして地域の人たちには別府大学の留学生を通して国際的な空気にふれてもらう。別府大学生としては、その地域の方々との交流を通してまたより多くの見識を積んでいくという、そういう企画を多く行っております。

○外岡コーディネーター 坂上さんは、三重県の名張市という所が御出身で、今もお住まいだと思いますけど、あそこも人口規模としては敦賀とほとんど大体似たようなもので、ただ予算は、特別会計の問題で敦賀の大体半分ぐらいというふうに伺ったことがあるんですが、名張のほうでもいろいろ大学の誘致だと、そういう問題があったと思うんですけど、その辺の経緯だとか、大学に例えばまちとしてどんなものを期待していたのかみたいな、ちょっと御紹介いただければと思います。

○坂上直人氏 福祉の理想郷ということで政策を打ち出して当選した方がおりました、それで大学を誘致するということになって、この土地で社会福祉学科というものをスタートさせて30年ぐらいの目途でというふうに始めた大学だったんですが、学生が集まらなかったり、受け皿となる施設等がなかったり、または過酷な重労働な現場ですので、そのために離れていったとか、そういった要因で新設から8年満たないんですけども、来年の3月に大学が撤退するというふうになってしまいました、地域によって介護や看護の差はやはり大きいのかなというふうに思いました。

○外岡コーディネーター 名張に来たのは皇学館ですよ。皇学館が三重県の伊勢にある神主さんになる大学というイメージとしては一番あるんですけど、皇学館大学という所の社会福祉の学部を誘致する形でしたんですけども、8年ぐらいで撤退してしまった。

そういうことで期待した、まず一つは福祉の人材を十分育成ということもなかなか難しかったし、それからまた地域振興という面で若い人たちに頑張ってもらいたいというところも、実はこれは私のほうから言っちゃっていいのかどうかわからないけども、実際何か名張市内に住む学生が少なくて、そんな話もちょっと。

○坂上直人氏 その地域は、三重県の伊賀という所なんですけども、伊賀盆地といって周りが山に囲まれていて、ちょっと都市部に行くにしても40分ぐらいかかるようなそういう辺鄙な所です。そんな地域の若者が集まるような所というのはなかなかないような所です。それでそこに居つかずに、その周りの都市部の所に学生寮を借りてそして名張に通ってたという生徒がいたりしてですね。

○外岡コーディネーター 住まないと、いろんな意味で経済効果を弱くするし、地域振興という意味で若者の動員という面でも厳しかったということになるろうかと思いますね。

山本さん何か、大学、今仕事をされている、現場、あるいは子育ての中で御自身のお子さんを進ませる大学というイメージ、大学というものは地域とどう関係するべきかという話で何かありますか。

○山本典子氏 今現在娘は女子大の附属中学に去年の春から通っているんですけど、やっぱり娘の中でもなぜその学校を選んだかという中で、大事だったのは、自分が将来その大学に進んで何ができるのか、何になれるのか、あとほかの自分の進む大学だけではなく、その周りの大学さんとどういう連携をとって授業とか交流をされているのかというのを見て私はここに行きたいと言って選んで進んだんですね。

それで、やはり人としてのコミュニケーションとか協調性とか、あと観察する力とか、我慢することとか、我慢といたら変ですけども、耐えるとか、じっくり考えるというのはやっぱり長いスパンでないと、私はできないというので、私もそれは賛成だったので、娘とともに今一生懸命やっている最中なんですけれども。やっぱりそういう地域とかかわりというのは大切だと思いますし、選ぶポイントとしてもそういうのは重要でした。

○外岡コーディネーター 今大学の附属の中学ということ。そうすると、いわゆるそれこそ幼稚園から大学まであるような学園の中ということになると思うんですけど、そういう大学と例えば地域との関係で、お子さんなんか参加されるとか、あるいは親御さんと一緒に何か一緒にやられるとかという地域との関係というのは、例えば具体的に何かあれば、御紹介いただきたいんですが。

○山本典子氏 結構頻繁にありまして、私の娘は今家政学、部活で家政学部のやつをさしただいているんですけど、その部活でさえも周りの近隣の公立の小学校、幼稚園、中学校の生徒さんたちと一緒にそちらの学校さんに赴いたりとか、こちらに来ていただいたりとかして、その食育、大学にも食物学科がありますので、兼ねてそういう交流とか、あと企業さんともコラボとか産学とかありますよね、ああいうのをさせていただいて、それを大学だけじゃなくて、その附属の全部をコミコミで1セットで活動させていただいているという形ですね、積極的に。

○外岡コーディネーター 中学生でもそういった所へもうどんどん出ていくということですよ。

○山本典子氏 そうですね、大学とも連携をとって。

○外岡コーディネーター 中学校のお子さんが例えばそういう所へ出られていって、何か成長されたとかね、今までの雰囲気とは変わったなど、もちろん年齢的に変わるときでもあるかもしれないけど、それ以上に何か感じられることはありますか。

○山本典子氏 やはり計画性を持って進めないといけないので、やっぱりある程度の時間の中で、そういうのでそれぞれの役割とかそういうのをきっちりつけて段取りを組むとか、そういうのはついたというか、できるようになってきているとは思いますが。あと、リーダーにならないといけないときはリーダーになって引っ張っていく力というのはついてきていると思います。

○外岡コーディネーター やはりそういった形で、この敦賀短大でもそうだと思うんです

けれども、そういった地域活動を通じて、ある意味では地域に学生を育てていただく場面というのが多く、これまでもあったと思うんですね。ですから、そういう意味では大学にとっても地域に出ていくことの必要性というのは間違いなくあるし、それからまた大学にとってもやはりその地域での存在意義を高めるというようなことで、ただその中でやっぱりいろんなことをやらなきゃいけない。今たまたま家政で食育ということが出ましたけど、先ほどの別府大学の事例では、国際、留学生も多いとか、そういう大学の個性を生かした形で地域貢献のイベントあるいはコンテンツを形成していくということがありましたので、やはりそういった大学の持っている、ある種のコンテンツの豊かさみたいなものが背景にある。ですから当然今お子さんが行かれている学園でも家政だけではなくて、そのほかの分野のいろんな活動も学部学科に応じる形でやられているわけですね。総合大学のいい所というのはあるのかもしれませんが、そういった形になるということになりますね。

さて時間もほぼ半分ぐらい、半分以上過ぎましたので、3番目の話題に移っていきたいと思いますけれども、敦賀短大の今後に何を期待していくのかということですね。

またあわせて、それを前提にしながら、同窓生それぞれのお立場で、今後大学がどういう形で存続していったらほしいかということですね。

この中には既に皆さんにお知らせした、あるいはまた先ほど学長のごあいさつにもありましたような公立法人化、あるいは看護学科というテーマも入っていただいても構いませんので、ぜひ皆さんの一人一人の御意見伺いたいなというふうに思いますが、じゃ山本さんからお願いできますか。

実は山本さんはですね、意見書の中で、もう既にこの大学が看護学科になるということがもう決まってしまうんだということで、看護系の学校になるんだとしたらこういうものをやるべきだと非常に具体的な御提案もいただいているんですね。ですから、それは一つまたここで御披露いただければいいと思うんですが、お願いします。

○山本典子氏 私はこのお話をいただいたときに、もう看護学校に替わるもんだと思って、

それならば看護学校として確実に経営していってもらわないといけない、存続してもらわないといけないというふうに考えまして、それでちょっと具体的な例として、こういうものがありますよということで御提案させていただきました。

まず第一には、とりあえず、看護学校をつくるのであれば、もう専門学校という形ではなく、短大、その先を見据えて大学、大学院という形で確実に形をつくってほしいということがまず第一で、その次に、大学、大学院とかだけでしたら、入学していただく学生さんの分母というのがものすごく少ないものになります。

それではこれから先、少子高齢化に向けての対策としてとても難しいということで、今厚労省のほうとかでも進めています、専門看護師や認定看護師さんとかのスペシャル、スペシャリティ、特別な知識や技術を持たれている専門の看護師さんが育成というのをされているので、そういうものをこの北陸の大学でつくるのはどうであろうかということをご提案させていただきました。

この北陸の中で、そういう専門看護師や認定看護師という育成機関というのが、専門看護師では石川県立看護大学が唯一1校存在するという状況で、がん、地域、老人、小児看護の専門のプログラムがあります。

あと、認定看護師さん、専門看護師さんになりますとちょっと大学院とかを卒業されないと出来ないんですが、ちょっとそれよりハードルを下げてもうちょっと育成しやすいというので認定看護師という資格があるんですけども、それは自学の大学病院の看護職員を育成するというので、専門学校では無理なんですけど、育ててそのある程度このその知識、その部分部分、がんだったり地域だったりとかいうのがあるんですけど、ある程度専門の知識を持たれて作業ができる看護師さんを育成する機関というのがつくれるのではないかと。

あと、それだけじゃなくて、分母を広げるという所で、現在もうお仕事をされている方、看護師をされている方というところの分母まで広げるというのを提案させていただきました。

た。現在大学病院や総合病院でお仕事をされている看護師さんはその病院内でブラッシュアップとかができたりとか、あと都会でしたら、製薬メーカーさんとかが販促を兼ねてそういう講習会とかをされるんですが、やはり地域、遠方になりますと、そういうのが少ないというのがありまして、そういうのを講習を受ける場所がないというふうにお聞きしておりますので、そういう北陸で中核となる教育機関になればなと思って御提案させていただきました。

○外岡コーディネーター ありがとうございます。要するに山本さんの御意見の背景には、看護系の大学というのはもうここ数年の中で非常にたくさんつくられていて、これからはまだまだその勢いというのは止まらない。そういう中で、先ほど基調報告の中にもありましたけれども、この敦賀という土地は非常に県外流出が激しい所で、学生確保という点での条件は変わらない。看護になったからといって、じゃそれだけで集まるかということ、やっぱり京都や滋賀にも大学があるよということが前提、石川にもありますね、今そういった形であるわけで、果たして本当に順調にいくのかどうかという御心配から、やはり特別の、ここでないと学べないとか、ここだったらこれができるというものがないと、これは看護でも、看護だから大丈夫ということではないよという非常に大事な御指摘をいただいたというふうに思ってます。

これはもうこれから大学づくりをする場合に看護という選択になるのか、あるいはまたそのほかの場合もあるのか、そこはまだわからないところがありますが、やはり大学づくりする場合の個性化という点で、非常に具体的な御提案いただいたということで、ありがとうございます。

飯野さん、どうでしょう。これから何を大学に期待したいかということ、またどういう大学であってほしいかということですね。

○飯野敦子氏 先ほど自己紹介のときにもお話しましたが、私の所には、日本史系の学校がありません。日本史系の学校がない代わりに、いわき市ってとても広いんですけども、

いわき市の至る所で何とか会、何とか会、何とか会てこう自分たちで人を募ってというか、勉強会を始めて、例えば企業とかも地域のことを勉強するのに、自分の会社の会議室を開放していたり、月1回勉強会をしたり、あとツアーをして、ツアーといっても遠方に行くということだけではなくて、地元を散歩するんですね。地域散歩じゃないんですけど、地元をめぐってお散歩して地域のことを勉強する勉強会をしているんですが、ただそれを統率する所、機関みたいな所がどこもないんですね。

学校だとある程度ずっと研究し続けているので、その研究者の人とかがいて、地域に根差したあと今地域に求められていることがどういうことなのかというのが具体的にできてはいるんでしょうけれども、私は例えば「いわき地域学会」という学会に参加しているんですが、その地域学会に参加していて、なかなかそれが自分たちの住んでいる所に効果もたらされないですね。何かこういろんな効果が本当は出てきてほしいんですけど、それが具体的なところが見えていないのがもったいないなと思うんですね。

短大の将来像ですか。短大の将来像として、こんなに地域のことを勉強している学生がいるんだから、そういう人たちが地域のブレーンとなる起爆剤というか、知的集団になって、地域のことを先ほど外岡先生お話してましたが、よそ者、若者、バカ者、この三つがそろっているというのが大学の特徴なんであれば、そのエネルギーを地元の人たちにもっと使ってほしい。地元の人に求められる学校になってほしいというふうに私は思います。

○外岡コーディネーター ありがとうございます。じゃ、鈴木さん。

○鈴木美和氏 私が勤めている会社で、あえて名前は伏せさせていただきます。大学でうちの販売店のほうに大学生が提案した販売員として入っていただいたことがあるんですが、それは大学が研究をしているからできる部分であると思います。それによって私たちが本来気づかないところの視点はやはり違うものがあります。それが考えることというのができるのは、学生のうちだけなんですね。お客様第一に考えますが、やはり販売に対して利益追求型に企業がなっていくます。その中で私であれば法人ですので、会社単位の取引に

なります。そのときに、例えば敦賀短大とはお取引ないんですけれども、したときに今のままでは敦賀短大とはお取引というのはちょっと難しいかなと思います。ただ敦賀短大のやっていることを個人的に見ると、まだまだ変更することによって伸ばせるんじゃないかなど。逆に外から見た部分と内側から見た個人の意見も混ざりますけれども、まだまだ伸ばせる域にあると思います。

企業で新入社員を採る場合、うちは幅広く採りますけども、多くの会社はやっぱり4年制の大学生を求めることのほうが一般的に多くなってしまっています。高校生でというのもやはり採りますけれども、この大学、短大であるならば、学べることもまだ多いと思いますし、日本史の部分、過去に築いてきた先生方、学生が残した論文、実績があればそれを大事にさせていただいて、4年制に向けての日本史学科ほかの部分の分野を伸ばしていただくほうが私はいいと思っております。

○外岡コーディネーター 坂上さん。

○坂上直人氏 最近はいかに就職できるかというニーズでありますので、手に職といえますか、就職に直結した広い分野の人材を育てる場となればいいと思います。特に担い手の不足している地域の伝統工芸職、農林漁業職など後継的人材育成の場にしてはどうかと思います。

○外岡コーディネーター 具体的にはそういう大学を出て、そういう地域の産業を支えていくというふうに理解すればよろしいですかね。そんなところですかね。

川窪さんはいかがでしょう。

○川窪大貴氏 敦賀短期大学の今までの25年の歴史の中でも女子短大から男女共学化、日本史学科と経営学科から地域総合科学科というふうに経営方針や運営形態は、今までもその時代に合わせて変えてきたと思うんです。なので、今回看護学科との合併やら何やらの問題で、そういった変化があるというのは仕方のないことなんですけども、僕の個人的な感情として、やっぱりこの地域総合科学科、敦賀短期大学の地域総合科学というのは残っ

ていてほしいなと考えています。

地域総合科学科という言葉インターネットで検索しますと、文部科学省のホームページの中に、地域総合科学科とはという定義的なものが載っているページがあります。それの中には、地域の求める人材をほかの4年制大学のような専門的なものにこだわらず、幅広く学べる履修形態というふうに書いてあるんですが、敦賀短期大学の地域総合科学科はまさにそのとおりなものを今までやってきていると思いますし、僕も一番最初に自己紹介でも言わせてもらったとおり、ここでいろいろな経験をして、結果的に今別府大学でそのような役に立てられていると思いますので、地域総合科学科と看護学科の併設とか、考えられることはたくさんあると思うんです。

福井県の敦賀市に地域総合科学科があって、ここで音楽もでき、歴史も学べ、パソコンや経営の学問も学べるということに何かしら学校としてそれに強い意味を見い出してほしいと言ったらちょっとあれですね、抽象的なんですけども、方向性というか、ちょっと言葉が難しいんですが、もっと熱意ある学生がここから巣立っていくように、これからも地域総合科学科からある意味個性的な、ある意味変わった人たちが出ていけばなと思っています。

○外岡コーディネーター 地域総合科学科に少し学生が来ないということで我々少し自信を失っているというか、疑問というか迷いが生じているところがあるんですね。そのあたりがどうも皆さんに送られたパンフレット、募集パンフレット、あれでどうも何も感じないという厳しい、山本さんだね、一番厳しいことを言って、ちょっと一言それを御紹介ください。娘さんに見せたら全くという。本当にいいお話だったので。

○山本典子氏 すみません。行きたないって言われました。(笑声) 何をしたいかわからないって、二言ぐらいで終わってしまったんですが、私も見た感じ、その地域総合学科というのを見て、漠然とし過ぎていて、何をしてはる何を学びはる学科、学ばせてもらえる学校なんやろというのが一番来て、すごい迷ってはったりしてるんやろな学校側。経営者

としての立場も学生さんがすごい減っているんでどうしようという思いがすごい酌み取れるので痛々しくなってしまったということで（笑声）すみません、正直な感想です。

○外岡コーディネーター そういう指摘が高校の先生からもされます。ただ、今川窪さんが紹介していただいたような、本来の強みを持っているはずで、成功している大学もないわけではないということで、そのあたりの大学のスタンスというものが地域総合科学科としては当然問われているというふうに思っています。

○川窪大貴氏 ただ何も考えずに入っただけの学生は多分この今の敦賀短期大学の地域総合科学科でやれることが多すぎて結局自分を見失うと思うんです。でも、僕みたいにと言ったら何なんです、もともとやりたいことがはっきりしている学生にとっては、ここでこれだけ入りやすい学校でこれだけ親身に接してくれる学校で、これだけやりたいことができるという学校であることがとてもうれしいというか、意味のあることなので、僕はそのあたりはぜひ守り通してほしいなと考えています。

○外岡コーディネーター そこなんですよね。ある程度目的がはっきりしている学生には非常にいい環境が提供できるし、チャンスもふえるし、視野も広がる。しかし、漠然と入ってきた学生は、結局何をしたかよくわからない形で卒業してしまって、卒業のときにも余り個性として発揮できない。そこは本当に大学として感じているところなので、その修正なしに未来はないなというのは本当に感じています。

大内さん、まとめというわけじゃないんですけど、大内さんのほうから、この大学に何を期待し、また今後どういう大学であってほしいかということをお話ください。

○大内裕子氏 看護学科については、本当に看護師不足という問題があって、それから子供を産みなさいと言う割には助産師が不足していたり、病院の状況も余りよくなかったりと、いろんな問題がある中で、やっぱり看護学科及び助産師学科というのは切実に必要なものだと私も思っています。

やっぱり先ほど山本さんからもお話ありましたが、学ぶ場所、看護のことで学ぶ場所

という意味において復帰する看護婦さん、いったん子育てとかで看護師を辞めて、過酷な現場ですから、子育てをしながら夜勤なんていうのは本当に理解者と同居している方がいらっしゃらなければできないわけですから、やっぱり辞めたら辞めっぱなしになっているもったいない人材がたくさんあると思うんですね。そういった人がいざ復帰しようとしたときに、実際に病院にすぐ行って実践できるかというのと、もう1年離れば薬の名前も変わってれば薬品も変わってれば全然変わってもう何がなんだかわからない、浦島太郎状態だというふうに私の看護婦をやっている友人から聞いたことがあるんですけども、そういった復帰をしたいと思っている看護婦さんも受け入れて、短期で研修をするようなシステムが必要じゃないかなというふうに思います。

それと看護学科だけではなくて、2,695名が心のよりどころになるように、今までの学科を何とかして存続していただきたいなというのが本当の私の気持ちではあるんですけども、敦賀という町を見てもらうと、敦賀という所は本当に歴史の宝庫であって、海で昆布ですとかいろんな面で発展してきて、歴史的に本当にいろんなことが詰まっている所だと思うんですね。

そういう過去の事実をきちっと学んでこそ未来のことを考えることができると思いますので、やっぱり敦賀の歴史を学ぶ大学がないと、町の発展にはつながっていかないんじゃないかなということを感じます。

ましてや福井県内というのはナンバーワンのシェアの技術や産業が数多くあります。例えば敦賀でしたら昆布ですわね。それからあと鯖江に行けばメガネ、それからもう少し福井のほうに行けば繊維、それから嶺南の小浜でしたら箸、それから敦賀もう一つ幼児玩具をつくっている会社もありますけれども、そういった見てみますと本当に日本全国のナンバーワンのシェアを誇る企業がたくさんあるわけですから、そういったところ、そういう技術というのはやっぱり過去からの発展とそういう企業者のいろんな努力もあってなんです、それが発展の証しですよ。

まして私も仕事をしていた原子力企業も日本で一番たくさん15基もの原子力発電所があって、これから地球温暖化に向けて解決していくためには原子力も必要不可欠だと私は思っておりますし、そういう誇るべき技術、原子力生産地として消費地に対していろんな働きかけができると思います。

以上のそういうすばらしい技術とかすばらしい商業があるわけですから、そういった所と手を組んで、企業とゼミの共同プロジェクトみたいなものを立ち上げて、ゼミの一環で学生が企業に入りこんで調査研究を行って、大学と企業の連携を図って地域貢献を行うことができるような、またここに来れば福井のすべてがわかる、そして近隣の都市のことがこういう密接なかかわりがあったんだなという、そういう広い所までわかって、ここに来れば何かできるんじゃないかというような、そして福井から手を挙げてこれで行くんだというような、福井のマイスター的な存在というか、そういう人たちを育てるような大学であってほしいなと、私は思っています。

○外岡コーディネーター ありがとうございます。もう予定した時間、過ぎてしまいましたけれども、まだ懇親会までは時間がありますし、まだバスの時間まで少しあります。若干延長することを覚悟しつつ、今お話いただいたことを非常に簡単すぎるかもしれませんが、まとめさせていただきますと、やっぱり敦賀短期大学の存在意義というのは、まだまだ今後も評価してほしいし、またされるべきだということころは、これ一つまとめとして申し上げていんだらうというふうに思います。

またそこには、非常に専門性の高い役割と、それからもうより広範で多様な人材を輩出するような機能というものももう併せ持つ大学というのが将来的には構築されていないと、なかなか今の厳しい時代を生き残っていけないのではないかと、そういう御提言をいただいたように思います。

それからまた同窓生としては、やはりいろいろと大学、大学自身も経営のことを考えながら、姿、形を変えていくということがこれはやむを得ないことだと思う。しかしながら、

これまでの経営、日本史、それから地域総合科学科、それぞれの学科の同窓生が帰属意識を持ってこの大学にこういうイベントがあれば集まっていけるような、そういう大学であり続けるということがどうしても大事で、あそこはもう自分たちの大学ではないというような形で切れてしまうということ非常に残念だという思いを深く持っておられるということが私感じる事ができて、ある意味で大変うれしく、また責任の重さを感じるようになるかと思います。

こんなところでパネラーとの話は終息に向かおうと思うんですが、今までのお話の中で、あるいは皆さんが、きょう来たらこのことは言っていかなきゃと学長もいるんだからぜひこれは聞いてもらわなきゃという意見をお持ちになってここへいらっしゃっている方もいらっしゃると思うんですね。

どなたかフロアーから御発言ございませんでしょうか。どうぞお願いします。

学科ともし期がわかれば、そしてお名前と行っていただいてからお願いします。

○小坂純子氏 8期の卒業生、日本史学科でした。旧姓は河村純子と申します。今結婚して小坂純子です。手紙をいただいた時点ではもうある程度看護学校に替わるのが決定だというふうに思ったので、これもまた時代の流れだなと、学校が替わろうとしていることは応援しようと思って手紙というか返事を書かせてもらったんですけども、きょうここに来てこういうパネルディスカッションを聞いて、まだ決まりではないというお話だったので、意見を言わせていただこうと思ってマイクを取りました。

私は日本史学科を2年間ここで卒業しまして、愛知学院大学のほうに編入をさせていただきました。実際2年ずつ違う学校で勉強したんですけども、社会人となって働くときに基本となったのは、この学校の勉強でした。

正直申しまして、編入先の大学で何を学んだかと言われると、ほとんど本当に大学を卒業したという証書と学芸員資格とか、司書資格という、ここで取れなかった資格をいただいた程度で、何もゼミでこれといった活動ができたわけでもなく、論文指導をしっかりと

てもらったわけでもなく、本当に勉強したいという気持ちを育てていただいたのはこの短大で、本当に外岡先生や多仁先生にお世話になりました。社会人になってからも考えて、どうすれば自分にこれができるだろうとか、どういうときにアドバイスをいただきに行ったらいいだろうかというのを考えることができたので、職場でも大変評価をしていただきました。それはもう全部短大で勉強したことです。

時代の流れで看護学校が少ないんだろうな、敦賀はそういえば1校しかなかったなと思ったので、これもまた時代の流れなんだろうなというような気持ちで看護学校になることを賛成しましたがけれども、今ここで皆さんのお話を聞きまして、卒業した学生は本当にこの学校で勉強できたことを大変評価しておりますし、心強く思っています。それは経営される方よりも卒業した私たちのほうが強く持っているのではないかと思います。

卒業した後にはいろんな形で姿、形を変えていく短大を見ながら、一体どうしたいんだろうなっていうような目先だけの人気集めで学生数だけを獲得したいんじゃないかというふうな気持ちも当然ありました。

今回の看護学校というのは本当に地域のためを思っていることなのか、それとも学生をただ単に集めたいだけなのか。それによって10年先、20年先の大学のあり方というのは変わるのではないかと思います。

今まで音楽とかいろいろされてきましたが、結果としてどうなりましたかということを一度振り返って経営の方には特に振り返っていただいて、5年後になくなるような学科ではなく、10年先、20年先敦賀にはこんな素晴らしい学校があるよと言われるような大学であっていただければ、看護学校でも構いません正直、もちろん日本史学科であることが一番うれしいです。ですが、そここのところをもう一度しっかり考えていただいた上で看護学校にしたいとか、公立化をしたいとかというようなところをですね、しっかり同窓生とか地域の方に説明できるような改編であっていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。(拍手)

○外岡コーディネーター ありがとうございます。本当に力強く、我々とよくけんかを
した学生です。(笑声) それだけの力がまだ残っているなど頼もしく思いましたけど、ほか
何か。けんかした学生まだ大分顔あるんですけど。どうでしょう。お願いします。

司会。いいですよ。

○秋山政美氏 21期生卒業生の秋山と言います。ただいま年齢は47でございます。

本日も学祭に「美浜もちっこ隊」で参加させていただきましたが、卒業してからも毎年
学祭仲間を連れて帰ってきております。そうですね、やっぱりこう頼まれると嫌って言え
ないんですが、本当に敦賀短期大学に入学してよかったなといつも心に思っています。

ですから、何かこうやりたい。短大のために何かやりたいと思って毎年来させていた
いておりますが、こうやって卒業生が集まるということが今までなかったの、いいなっ
て今すごく思っています。

ですから、先ほど外岡先生がおっしゃったように、この時代に伴って形を変えていかな
きゃいけないというのは、この時代ですからしょうがないと思いますが、こうやって卒業
生が集まる機会というのはちょっと感動しているんですけど、皆さんどんどんいろんな意
見をお持ちだと思うんですけど、ちょっと言っていたきたいなと思います。

○外岡コーディネーター 司会進行までしていただいて。

ほんと、どうでしょう。せっかくここへ来られて。どうぞ浦畑さん。

○浦畑奈津子氏 5期生の浦畑と申します。今ほどずっとパネラーの方のお話聞いてて、
山本さんの現状、痛々しいというお話とかですね、鈴木さんのこの学校は研究室は常に
門戸が開かれているというお話とか、川窪さんの専門でやりたいことがあって当然それを
深めることはあるけれども、さらにそれに関する幅広い知識を身に着けることができた
という点、いずれも私も同じように考えておりましたので、一々心の中でうなづいていたん
ですけども、今回この同窓会の連絡を受けて中の書面を見たときに、印象としては、いろ
いろと学科が再編されるとか、看護学科と合併というか、そういうふうな書き方をしてあ

ったんだけど、私の印象としては、最近いろんな所で店舗で行われている居抜きみたいな感じ、短大という名前は残るけれども、結局その看護専門学校の行き場がないので、それをそのままこの中に入れてしまうという、そんな印象を受けたのが実際のところですよ。

ただ恐らく、私も今、富山市のほうで学芸員をやってますので、市の財政的なことも考えますと、いろいろと学生が少ない中で学校を運営していくというのは思いだけではなかなか現実問題難しい所もあるんだろうし、そういった意味も含めてこういう話が出ているんだろうなとは思ったんですけども、今こちらのほうに集まっている卒業生の方々のいろんな思い、あるいは25年間の蓄積、学生の蓄積ですね、そういったものをすべて市長が理解した上でこの結論を導き出しておられるのかどうか。それを全く無視した上で、机の上、紙の上の数字だけでこの結論に市長が達しているのであれば、まだまだできることはあるんじゃないかなというふうな印象は持っています。

ですから、一度その辺をこれまでのいろんな蓄積をもっと私たちがアピールしていく必要があるんじゃないかというふうなのをちょっと感じました。

自分の卒業した学校が全く違った形でなくなってしまうような印象を受けるのはやっぱり嫌ですので、今いろいろと卒業生の間で考えていかなくちゃいけないんじゃないかというふうに感じました。(拍手)

○外岡コーディネーター ありがとうございます。よく口をとんがらがして文句を言ってきた学生です。随分落ち着いて話していただいたので、ほっとしているんですが。

茶化しているわけじゃなくて、今おっしゃっていただいたことというのは本当に皆さんからいただいた意見書の中も看護学科賛成ですという、大学の事情でしょうがないですねっていう意見もありました。皆さんのお手元に意見集というのが行っていると思います。これは同窓会案内の返信に意見を書いていただいた方々の意見をまとめてプリントしたものです。

これはざっとご覧いただければわかるように、思いとしては看護学科やむを得ないかな、

あるいはもう看護学科でいいですよというような御意見からですね、やはり自分の大学がなくなってしまう。居抜きという話も今出ましたけれども、そういう形での転換なんですねというような御意見、あるいはまた地域総合科学科、あるいはこれまでの大学の実績というものを何とか生かしてくれと、そういう励ましの言葉、様々記されていると思います。こういったものというのは、当然これから市長の目にも触れるはずですし、きょうここで話し合われた事柄というのも、そのままではないかもしれませんが、学長先生、あるいは常務理事を通じて、市長に伝えられていくはずですよ。

果たしてそれが机の上の数合わせの問題だけだったのか、それとももうちょっと先ほど河村さんからも指摘があったように看護大学としての崇高な理念をきちっと築き上げての大学構想なのかということが、本当にそこから問われてくることになると思いますので、やっぱり卒業生としてしっかりそこを見守っていただくということが今後も必要だと私も思っております。

ほかに何かぜひ。どうぞお願いします。加藤さん。

○加藤翔大氏 何期生になるんですか、去年卒業した、地域総合科学科の加藤翔大と言います。

僕としては、僕の個人的な意見ですけど、看護学科を今さら、僕の印象として合併してこちらの短大に持ってくるという状態としては乗っ取られているようにしか、僕には乗っ取られるというふうにはしか見えなくて、なおかつここにこんなこと言っているのかわかんないですけど、現状向うの看護学校のほうでも定員割れしていて、全然経営として成り立っていないところを、あえてここに持ってきたからじゃあ変わるかといったら変わらないと思うんですよ。

現に、福井県内に看護系の学校というのは、県立大学にありますし、医療短大もあるし、嶺南にも青池学園であるわけだし、だから県内に幾つもおほかにも多分武生看護とかあって幾つもある中に、あえてまたここにもう一つふやして潰し合いしてどうせまた二、三年後

になくなるとかということ繰り返すぐらいだったら、今の地域総合科学科という学科をもっといいとこって絶対たくさんあって、そこをアピールしきれてないだけだと思うんですよ。

僕自身は地域総合科学科という学科に入って、何がしたいかわかんなくて入ったんですよ。それこそさっきの余り特別何がしたいと決まっている学生は入るとメリットがあると言ったけれど、別に決まってない学生にとってもメリットというのは結構多くて、その中でいろいろ模索をして、これがしたいという道が決まったから僕は仁愛大学という所に編入して、心理をやっているんですね、今。その心理をやりたいって思うようになったのもここで日本史とか情報とか、それこそ心理とかっていろいろなものを一応一通りやってみて、じゃ僕はこれを心理がやりたいとなったから仁愛大学に編入することができたんですよ。

という使い方をすれば、この学校というのは、進路が決まってない迷っている学生にとっては今から進路を決めていくためにはものすごくいい大学だと思うんです。いい学科だと思っているんですね。

だからそこをもっと全面的にアピールして、例えばその方向だとさっき話されてたみたいに、地域に根差したというにはちょっと違うかもしれないけれど、一つのステップというこの短大を次に進むためのステップとしてもっと利用していったらどうというようなアピールの仕方があるんじゃないかなって感じているので、僕個人としては地域総合科学科がもっと長く続いてもらえるとうれしいなと思います。去年いろいろと大学のことについて、僕は学長さんの所へ行ってお話させてもらったり、常務理事さんの所へ行ってお話させてもらったりしたときに、意見を言ったことに対してちゃんと誠実に回答を返してくれて、これから先はこうしていこうと思いますという回答をちゃんと返してくれたんですね。ということはそれだけ柔軟な考えをお持ちでしっかり回答を返してくれる。そして実際に来年からちょっと仕組みをちゃんと変えて、地域総合科学科でももっと方向性を見つけや

すいように替えてくれるという話になった途端に、看護学科でぼんと来ちゃったので、何かせつかくつくったのにもったいないなというのが僕の考えなので、できればせつかく来年からやろうとしていることをもっと継続できるような形で残していってもらえるといいと僕は思っています。(拍手)

○外岡コーディネーター ありがとうございます。

そろそろ時間のほうも迫ってまいりましたけれども、どうしようかなと思っている方もぜひ御意見いかがでしょう。お願いします。

○小堀幸恵氏 11期生日本史学科の小堀と申します。私としては、今ある私が学んだときの日本史学科の雰囲気というか、中にあるエッセンスだけではなくさないようにしてほしいと思っております。私は多仁ゼミに所属しまして、うちのゼミでは1年間かけて地区調査をするんですけれども、右も左もわからない状態で私たちはいきなり地区に蹴り出されました。もう半泣きになりながら調査をして1年間かけて報告書を何とかつくりました。正直いろいろと足りない所も多いような報告書かもしれませんし、その当時は一生懸命やっただけなんですけれども、きっと今見たらここも足りないあれも足りないってあると思うんですけれども、ここで蹴り出されて、つくって泣きながらやった経験というのはもうどこに出ても絶対に有用な経験でしたので、そのエッセンスだけではなくさないでほしいと思います。(拍手)

○外岡コーディネーター ありがとうございます。最近では蹴ってしまうと、そのままどこかへ行っちゃうような学生がいて(笑声)、僕らが心配をしてなかなか蹴る勇気がなくなっています。こっちも年をとったのかもしれないんですけど、地域調査は今でも続けておりますし、今後もこの大学がある限り続けていくはずですので。またその成果も後で見てください。

もう本当に力強い意見をたくさんいただきまして、パネラーのほうも、随分自分たちが言えなかったこととかいうことも大分補っていただいて、大分まとまってきたと思います。

今日の成果というものが必ずこの短大の未来の展開といたしますか、発展というものにつなげていかなきゃいけないというふうに思いますけれども、そのあたり学長先生のほうから、きょうのパネルディスカッションを聞いていただいて、今後、学長先生という非常に難しいお立場ではございますけれども、ひとつ何かコメントをいただけるとありがたいと思うんですが、よろしくをお願いします。

○三橋学長 きょうのパネルディスカッション、聞かせていただきました。外岡先生の基調報告、これを受けまして、それぞれ年度の違い、それからまた学習された課程の違いはあったわけですが、6人のパネラーの方々それぞれ真剣に自分たちの体験を踏まえた御意見を頂戴いたしました。非常に感銘を深くしたわけです。また会場の中からも非常に真摯な御意見をたくさんいただきました。

結局我々も今いろいろと悩んでおるわけでありましてけれども、問題は、やはり日本全国的に18歳人口が激減していると、結局数少ない、俗っぽく言えば数少ない学生を、昔林立した大学が取り合いをしているというような現況であります。

統計等を見ますと、この数年間の間に160を超える短期大学が消滅しております。そのうちの幾つかは4大への転向をもって生き延びるというような形もありますけれども、非常に定員割れを起こしている大学、これは4大と言わず短大と言わずたくさんございます。その中でいかに皆さんのこの長い伝統と重みを受け止めて、そしてこれを未来に継続していくか、我々のこれは責任の一番重大な点でありますけれども、確かに看護学科、単科にして果たしてそれで学校経営が成り立つかという論議も今まだ続けております。

先ほどおしゃっていただいたように、結論はまだ出ておりません。おりませんが、果たしてその看護単科だけで経営が成り立っていくのかどうか、これも非常に疑問のあるところでございます。

どういう形で進むにしろ、我々の最大の困難点というのは、学生の獲得であります。これがないと、いわゆる現在の公設民営と言われておりますうちの大学にしましても、説明

が見つからないわけです。おまえとこは学生がちっとも来んやないかと、それを言われますと、もう我々も何とも言えんという弱みがございます。

いろんな意味で今度、きっかけというのは昨年の寂聴先生が見えたときにたくさんの教え子の皆さんが集まっていたという、これを契機にして何とか今まで空白部分ではあってあったというとおかしいですが、連携がとれていなかった同窓会の組織を再編して、そしてこういった論議についても、同窓生のお力を再結集する中で、いろんな意見を述べていただいて、一つの今後の大きな我々の力にしていきたいという気持ちもあるわけであります。そういう意味で、この25周年を契機として、たくさんの同窓生の皆さんが集まっていたということ非常に私は力強く思っておるわけです。

きょうある1年生の学生のお母さんに学祭でお会いしました。そしたら、うちの今お世話になっておる学生ですけども、娘さんですけども、敦賀短大はいい大学やいい大学やと余り言うので、うちの親戚の娘も勧めたら来年行くて言うてますので、ひとつよろしくお願ひしますと、こういううれしい話も聞いたわけであります。

どうか同窓生の皆さんもお知り合いの方、また御自分の娘さんあたりをどうぞ積極的にひとつこちらに送っていただいて、何とか学生募集、これの目的を何とか果たしていい結果を得ていきたいなというふうに思っております。

どうかひとつ今後ともいろんな意味で御支援をいただきたいと思います。きょうは本当にありがとうございました。パネラーの先生ありがとうございました。(拍手)

○司会 三橋先生、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして敦賀短期大学25周年記念同窓会パネルディスカッションを終了させていただきます。御来場の皆様、御清聴ありがとうございました。(拍手)

午後4時13分閉会